

ドを核とする都市経営と會社政廳による支配との對立であつた。そこで、この都市蜂起を、1、東インド會社の貿易政策とそれへの在地商人・手工業者層の對應、2、マドラスの都市的性格、3、蜂起集團のギルド的性格、という視點から検討したい。

カローシユテイー文書の年代について

長澤和俊

カローシユテイー文書の年代については、先年、ケンブリッジ大學のブラフ教授が二二六—三二一年に比定する詳細な研究を發表され、ついで榎一雄博士はその説を大體肯首されながらも、若干の補訂を加えられて、二二五—三二四—三年とする説を發表された。

これらの高説は多年この文書の研究に没頭された兩碩學の結論として、まさに精緻な考證の粹を盡したものと云える。しかしここ二、三年、魏晉の西域經營を檢討した結果、私は右の高説に若干の疑問を抱くようになった。

ブラフ教授はカローシユテイー文書中に見える王の稱號の變化に注目し、アムゴカ王十七年を二六三年に比定した。それは『晉書』卷三、武帝紀太康四年（二二三）條の

八月、鄯善國遣子入侍
をマヒリ王即位の時のこととし、逆算したものである。

しかし魏晉の西域諸國との關係を追跡してみると、晉初は河西地方に動亂が相次ぎ、かえつて魏初の西域經營の方が活潑である。最

近カローシユテイー文書を精査した結果、アムゴカ王十七年は魏太和二年（二二八）に比定すべきであり、文書の年代は二〇三—二八八／九〇年に比定されるべきであるとの結論に達した。

インドネシア共產黨武力蜂起の失敗と

メッカ巡禮者との關係（一九二六—二七）

永積昭

一九二六—二七年の交、オランダ統治下でインドネシア共產黨はスマトラ西部およびジャワの各地において武力蜂起を行なつた。時期尙早でもあり、準備不足でもあつたこの蜂起はオランダ植民地政府によつて彈壓され、以後十數年の反動政策時代を迎えるのである。

そのインドネシア共產黨員の大部分は國內で處刑されたり、または邊地に追放されたりした。しかし一部の者はイスラム教の聖地メッカに潛入し、同胞の巡禮者に對して政治宣傳を行なつてゐるとの情報が入り、オランダ外務省および植民省の注目を集めた。

インドネシアで最大の信者數を持つイスラム教は、聖地巡禮を信者の神聖な義務のひとつに數えている。インドネシアは地理的に聖地から最も遠いにもかかわらず、全世界からの巡禮者中、極めて大きな比率を占めていた。とくに問題の時期には、イスラム曆の年廻りもよく、ゴムその他熱帶農産物の好況も幸いして、同地およびマライ半島出身の巡禮者數は、史上空前にのぼつた。

政治宣傳を行なつていたインドネシア共產黨員は幹部ではなく、

武力隆起とも關係薄かった。その上新興サウディ・アラビア國王イブン・サウドがオランダの要請を容れて彼等の逮捕に踏み切ったことは、全世界に反響を起し、オランダの立場を苦しいものにした。

五四運動におけるプロレタリアート

の役割について

狭間直樹

五四運動が中國近代史上の劃期的事件であることは、だれしもの認めるところである。その劃期性については、毛澤東の指摘にもとづき舊民主主義革命から新民主主義革命への轉換點ととらえる觀點をほぼ定説としてよいだろう。新民主主義革命の内容規定としてふつう挙げられるのは、①プロレタリアートの指導、②人民大衆の参加、③反帝國主義・反封建主義の性格、の三つの指標である。

これらの三指標は、いうまでもなくがいに關連しあうものであるが、とくに第一項については五四運動を新民主主義革命の開始と認める研究者のあいだでも評價がわかれ、論争がおこなわれてきた。かつて一九六〇年代のはじめに中國でおこなわれた一連の論争は、プロレタリアートの指導を確認することで一應の結着がつけられたかのごとくであるが、ちかごろのわが國の研究では、たとえば徳毛和子氏のようにブルジョアジーによる指導との見解もだされるにいたっている。

プロレタリアートの指導を云々するためには、その階級的形成と運動のなかではたした役割についての評價をまず確定せねばならない。六三後における罷工・鬭争の具體的分析を通じて上述の課題にたいする卑見をのべたいと思う。

元末明初の西系紅巾について

野口鐵郎

元末の混亂の中に生起した紅巾勢力には、大別して二つの流れがあったことは周知のことである。そのうち、白蓮教系とも東系とも呼ばれている部分に次の王朝の創建者朱元璋が係わっていたが、長江中流域から上流にかけての江西・湖廣・四川などを基盤としたいわゆる西系紅巾は、朱政權と敵対し、やがてその前に屈伏してしまふ。

本日は、この西系紅巾の構成要素、それと朱政權との關係にしほつて報告し、ご叱正を得たいと思う。

西系紅巾集團を構成する諸要素は、東系紅巾におけるその如くではない。少くとも、彌勒下生信仰集團と子元系「普」字信仰集團の二つの宗教的集團が武力的集團と結びついて存在し、ときに両者は混淆する様相を見せながらも、それぞれ別個のものとして活動し、對抗していた。いわば、宗教的には、徐壽輝——明玉珍の派と陳友諒の派とがあつたのであつて、しかも、前者にはその宗教に基く世界出現の姿勢がみられ、後者には武力的集團としての色彩が強